

パリ協定実現のカギを握るのは、
企業や自治体といったプレイヤーたちの
率先行動と、それを支える脱炭素技術である。

第8回

(株)NHKエンタープライズ(前編)

(株)NHKエンタープライズ 制作本部情報文化番組 エグゼクティブ・プロデューサー 堅達 京子氏
聞き手 WWFジャパン 気候変動・エネルギープロジェクトリーダー 小西 雅子

“脱炭素革命”の衝撃がもたらしたものの ビジネスの変化を実感とともに

2015年12月の国連気候変動枠組み条約第21回締約国会議(COP21)でパリ協定が合意されて以降、気候変動対策は、「低炭素化」から「脱炭素化」へ、大きくパラダイムシフトされたといわれる。その渦中にある社会とビジネスの変化を強く印象づけたのが、2017年12月に初回放送されたNHKスペシャル「激変する世界ビジネス～“脱炭素革命”の衝撃」であろう。



2017年12月に放送されたNHKスペシャル「激変する世界ビジネス～“脱炭素革命”の衝撃」

国際放送を経てNHKスペシャルで

小西 私は、脱炭素化に向けた日本の変化を大きくリードしたものの一つが、NHKスペシャル「激変する世界ビジネス“脱炭素革命”の衝撃」であると思っています。堅達さんは、番組制作者として気候変動をテーマに取材を続けてこられたのですか。

堅達 はい、今はライフワークと思っています。もともとは森羅万象のテーマで取材をしてきました。ボスニア内戦やイスラエルとパレルチナの紛争、また学校現場の課題など、ジャンルもさまざまです。密着型の取材が多く、最初につくったNHKスペシャルは、末期ががん患者が暮らす仏教ホスピスを春夏秋冬にわたって撮影したものでした。

2007年にIPCC第4次報告書の公表にあわせて「未来への提言」という番組制作に携わりました。実はその時まで、気候変動が人類の運命を左右するところまで差し迫っていることに恥ずかしながら気づいていま

せんでしたが、取材を進めるうちに、未来世代に責任が取れない事態になることを痛感し、以来、あらゆる形で気候変動に関する番組制作を続けてきました。しかし、どこか届き切っていないことも感じていました。

2015年のパリ協定は大きな契機となりました。世界で起きているビジネスの激変を伝えたいと、2016年、脱炭素ビジネスにフォーカスをあてた企画をBSで立ち上げようと試みましたが、残念ながら企画は通りませんでした。

小西 率直に申し上げると、それまでの国内の混沌とした状況からすれば、番組を実現されたことそのものに驚いています。なかなか企画が通らない中、番組をこのタイミングで世に送り出すことになったのはどうしてですか。

堅達 パリ協定から1年間で社会やビジネスが加速度的に変化したことと相反して、番組として成立させる理解を得るのに時間を要しました。思案した挙句、2017年6月

に先にNHKワールド（英語放送）で番組をつくりました。世界の金融界に起こっている変化や企業の反応を映像で記録して見せたのです。「パラダイムシフトが起きている」というメッセージを込めて。その後、この映像と一緒にNHKスペシャルの事務局に提案したところ、幸い企画が通りました。

もちろん、国際版と国内版では視点も異なります。そこで、COP23を舞台として、日本気候リーダーズ・パートナーシップ（J-CLP）に協力を仰ぎ、COP23に参加する企業に密着することで、企業目線で世界との違いを肌で感じてもらうと考えました。

企業目線で語る新鮮さ

小西 WWFジャパンでは、複雑化する温暖化の科学や国際交渉について、日本の視点から今もっとも大切だと思われる論点を整理し、ジャーナリストの皆さまと意見交換させていただきシリーズ勉強会を、2008年から開催してきました。そして、これまで多くのマスメディアに気候変動に関するさまざまな情報提供をしてきたつもりです。しかし、世界の潮流をグローバルな視点で捉えたテレビ番組がなかなか見られないことを残念に感じていました。番組の特徴でもある「ビジネス」に着目点を移された理由は。

堅達 企業目線で語ることは予想以上に新鮮でした。COP23で企業に密着してみると、石炭に対する日本への反発は相当強いものがありましたし、参加企業がそれぞれに自分の目で見えて驚く姿が撮影できました。「これが現実です」という思いで、ビジネススペースの枠組みとして伝えたところ、環境問題に関心の高い層のみならず、たくさんの方が番組を見てくださいました。結果として、ビジネストレンドとして気候変動問題を捉える人たちに、伝えることができたと思います。

ビジネスの動きを報道したいという思いは、COP21前後から持ち続けていました。しかし、COP21のパリではテロが、COP22のマラケシュでは、トランプ氏の大統領当選

があり、そのたびに、ビッグニュースに優先順位をさらわれて、チャンスを逃してきました。世界の動きと比べれば、制作が2年遅れになってしまったかもしれません。新しいものをつくるのに苦労はつきものですが、最終的に伝えられて良かったと思っています。

小西 世界最大のメディアだからこそ、報道の重さがあります。

堅達 英国放送協会（BBC）では、昨年10月のIPCC1.5°C特別報告書の発表を、トップニュースとして報道しました。NHKは、そこまでのボリューム感で報道することはまだできていません。公共放送として公共性を担保した番組づくりが何よりも必要ですが、最近では、先の世代よりも目先のことに捉われすぎる傾向も見受けられます。

10年間、伝え方には苦労してきました。私たちマスメディアにも、外圧で初めて気づかされること多い風潮があることを反省しつつ、これからますます加速する脱炭素の風をしっかりと伝えしていきたいと思っています。（次号に続く）

収録日：2018年11月19日

取材後記

温暖化は目に見えない長期的な脅威であるため、中でもテレビが温暖化問題をどう伝えるかはとても重要。NHKが、温暖化を“ビジネス問題”として捉え、世界から日本が批判的に見られていることを伝えたこの番組は、日本企業に衝撃を与え、経営層にまで届きました。この番組放送にこぎつけた堅達さんの信念に惚れました♪（小西 雅子）



（げんだつ きょうこ）

1988年NHK入局。報道番組のディレクター、プロデューサーとしてNHKスペシャルやクローズアップ現代を制作。特に気候変動をテーマにした数多くのドキュメンタリーを手がける。「日本環境ジャーナリストの会」会長。



（こにし まさこ）

国連の気候変動会議などでの国際交渉や、国内の気候変動・エネルギー政策提言に従事。温暖化をめぐる経済動向や、世界の温暖化対策にも精通する。気象予報士として、予測される温暖化の影響に警鐘を鳴らす。